

男女共同参画“お勧め”DVD紹介

今回は、インターンシップ実習生として、男女共同参画推進に関する仕事を初めて体験された、富山商船高等専門学校4年 矢郷 瑞穂さんに紹介してもらいます。



「ワーク・ライフ・バランスを知っていますか？
～働くオトコたちの声～」

(2008年内閣府男女共同参画局製作)



ワーク・ライフ・バランスとは「仕事」と「生活」を調和させるライフスタイルのこと。家族と共に過ごす時間、リフレッシュの時間、地域での活動の時間、自分を成長させるための時間を大切にすることが求められています。

ワーク・ライフ・バランスを推進させていくことで自分自身も社会も得るものが大きく、一方、企業にとっても働く意欲と高い能力を持つ人材の確保につながっていくと思います。男女共同参画社会を作り上げていくためには、ワーク・ライフ・バランスの推進、男性の働き方を変えることがポイントとなってくると思います。

このDVDでは、そんなワーク・ライフ・バランス社会の実現を目指す企業や、仕事や家庭の理想的なバランスを実践する人々の姿をドキュメンタリーで紹介しています。男女参画・ボランティア課及び富山市男女共同参画推進センターにて貸出しています。お気軽にお問い合わせください。

編集後記

～編集委員となつてとうとう最後の号になりました。任期は終了します。～

連載では、家庭の一場面、夫のつぶやき、妻のつぶやきを取り入れてきました。いかがでしたか？

また、昨年10月には富山市において「日本女性会議2008とやま」が開催され、県内外から多くの方が参加され、本当に有意義な会議でした。

私たち自身、『男女共同参画』をよく理解せずにこの編集委員の仕事を始めましたが、この2年間、さまざまなお話へ取材にでかけたり、編集作業をする中

で、考えを深めることができました。

これから生活していくなかで、男性も女性もお互いを認め、思いやりをもって理解していけば自然体でいられるのではないのでしょうか。

2年間は長く、また短い期間でもありましたが、多くの方々に協力していただき感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

(五十嵐・越前・西藤)

“あいのかぜ”は、男女共同参画社会の実現に向けて、市民一人ひとりが男女共同参画に関する正しい理解と認識を深めることを目的に、公募市民3人からなる編集委員によって企画・編集された情報交流誌です。

【編集・発行】

富山市民生活部男女参画・ボランティア課
〒930-8510 富山市新桜町7-38
TEL (076) 443-2051・FAX (076) 443-2176

“あいのかぜ”へのご意見・ご感想をお待ちしております。

【宛先】〒930-8510 富山市男女参画・ボランティア課(住所記載不要)

【アドレス】danjyo-volun@city.toyama.lg.jp

あいのかぜ

ai no kaze

2009年 冬号
VOL. 27



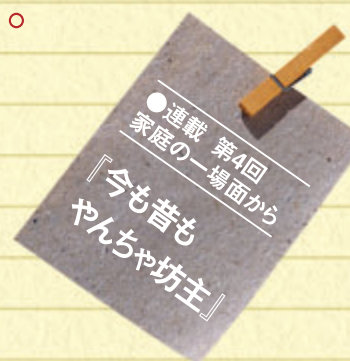
2008年10月17日・18日開催
日本女性会議2008とやま
第13分科会「くらしと環境」より
(ファミリーパークにて)

“オーストラリアからこんにちは。”

～日本と違うところがいっぱい～

＊
〈レポート〉日本女性会議2008とやま

＊
男女共同参画社会づくり作文コンクール



“オーストラリアからこんにちは。”

～日本と違うところがいっぱい～

日本での生活は他の国と比べて快適なの
でしょうか？ふと疑問を抱いた私たち編集委員
は、現在オーストラリアで暮らすウールコック・
加寿美さんにお話をうかがいました。

ウールコック・加寿美さんは、夫 デイビッドさ
んと7歳・5歳の子ども2人と一緒にオーストラ
リア・メルボルンで生活しています。

今回は、富山のご実家に帰国中の加寿美さ
んにお会いしました。

取材を通して、改めて日本の社会・家庭で
の私たちの日常を考えてみましょう。



ウールコック・加寿美さんご家族のみなさん
：加寿美さんのご実家にて

WORK 仕事

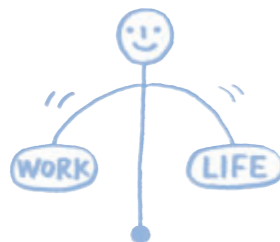
オーストラリアでは毎日どのように 過ごしているのでしょうか？

オーストラリアに移住して8年になりますが、今年、2
人目の子どもも小学校に通いだしたので、自分の時間
が持てるようになり、4月から幼稚園教員アシスタント
の仕事を始めました。

オーストラリアの女性は、仕事をしている人のほうが
多いですが、日本と同じく家庭を持つと非正規雇用の
職につく人が多いですね。私も、子どもが小学校に行
っている時間だけ仕事をしたいのでパートタイムで働
いています。就職面接の際に、必ず就労の希望時間
帯を伝えることができ、雇用主との話し合いのなかで、
就労時間帯が決まります。その代わりに、日本のように
「どんな仕事でもいいので頑張ります！」というスタンス
では仕事はもらえません。自分にはどんなことができ、
その仕事に対してどれだけやる気があるのか自己アピ
ールが必要ですね。

また、非正規雇用労働者への社会保障は日本と同じ
で薄く、さらに有給休暇はありません。しかし、非正規
労働者の時給の設定は高いのです。その点日本とは
違いますね。

WORK LIFE BALANCE



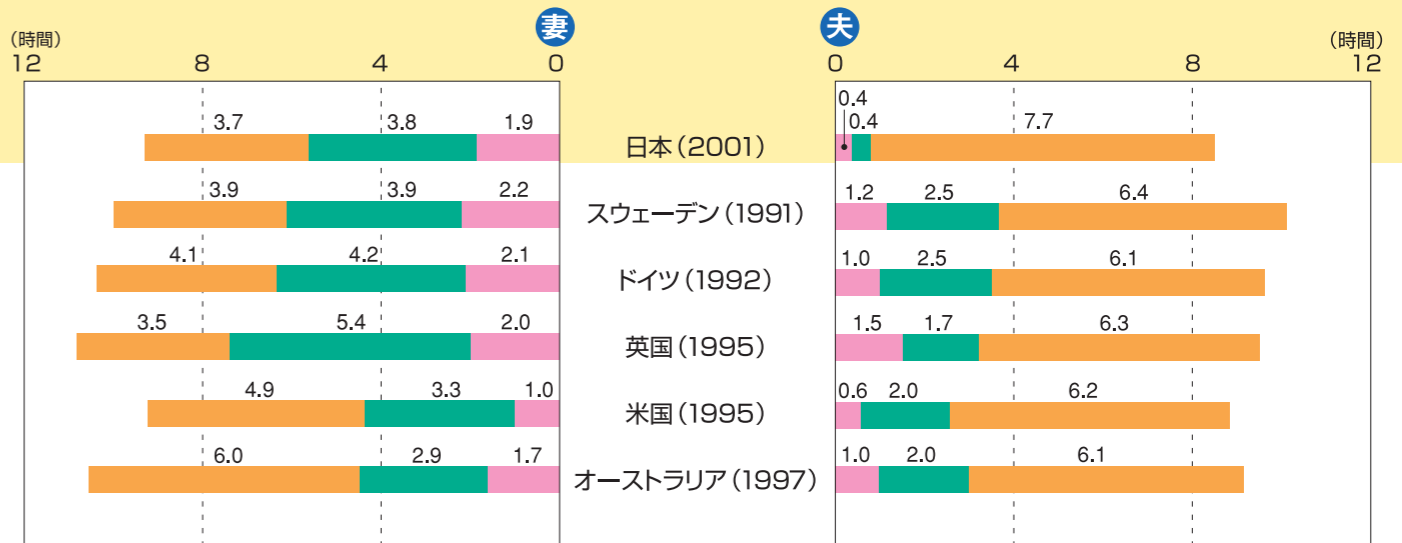
ということは、オーストラリアの方が 働きやすい環境ということですか？

そうですね。労働者にとってのサポート体制もある
程度整っていますので、働きやすい、また、「働きたい」
人が職場を見つけやすい環境ですね。

子どもたちが現在通っている小学校には、併設の
託児施設（日本でいう放課後学級のようなもの）があ
り、専門の指導員もいて、朝7時から登校時間までと、
放課後から18時まで利用可能となっています。私も週
に1日、子どもたちの学校が終わるまでに仕事を終えら
れない日があるので、その託児施設で子どもたちをみて
もらっています。働く母親にとっては強い味方ですね。

また、オーストラリアでは、仕事をしていても、自分の
時間を重要視します。自分の時間を利用して、資格を
取るためにスクールに通う人も多くですね。スクール
に通うための自治体からの資金補助など制度も充実
しているので、若い人達にとっても経済的な負担も軽
くスキルアップに励めるような環境です。実際に日本
にいたときには、金銭の問題や人目が気になってでき
そうにもないことだったと思います。日本では、今の自
分にできることや家庭の状況にあわせて仕事を選択し
ていたけれど、オーストラリアでは、自分のしたいこと
を優先して、そのために周りの環境を調整する方が一般
的ですね。

育児期にある夫婦の育児、家事及び仕事時間の各国比較



1. OECD「Employment Outlook 2001」、総務省「社会生活基本調査」(平成13年)より作成。
2. 5歳未満(日本は6歳未満)の子供のいる夫婦の育児、家事労働及び稼働労働時間。
3. 妻はフルタイム就業者(日本では有業者)の値、夫は全体の平均値。
4. 「家事」は、日本以外については「Employment Outlook 2001」における「その他の無償労働」、日本については「社会生活基本調査」における「家事」、「介護・看護」及び「買い物」の合計の値であり、日本以外の「仕事」は、「Employment Outlook 2001」における「稼働労働」の値。

LIFE 家庭

では、仕事と家庭の両立も しやすいのではないですか？

実際、今の私は、仕事と家庭の両立がうまくできて
いるかなと思います。

夫のデイビッドも家事には協力的で、ベッドメイキング
や子どもの着替えの世話、食事の後片付けなどをしてく
れています。他の家庭の話も聞いていても、日本よりは
夫婦での家事分担は進んでいて、帰宅が早い夫が夕食
を作ったり、学校への送り迎えをしたりしているようす。

オーストラリアの人々は自分の時間も大切にしますが、
家族との時間も大切にするため、休日は「家族」と過
ぎすのが普通ですね。子どもがいる家庭はもちろん、子
どもが自立した後は夫婦で過ごす家庭も多いのです。

それから、私の子供たちが通う小学校では宿題がな
いんです。大人が家に帰っ
てまで仕事をしたくないの
と同じで、子どもも学校で十分
勉強しているのだから、家
では勉強をせず、家族団らん
の時間を過ごしたほうが
いいという思いからだそう
です。これも家庭を大切に
する気持ちからでしょう
ね。我が家でも、放課後
は、子どもたちと一緒に
夕飯の餃子を作ったりと、
楽しく過ごしていますよ。



家族で過ごす休日は、 どんなことをされていますか？

わが家ではよく、家族みんなで色々な所へ出かけます。
バーベキューなどをして過ごす家庭も多いようです。また、
オーストラリアでは、「両親と別居」が一般的だけれども、
必ず週末には両親の家に出かけていき、一緒に時間を
過ごしています。日本では、毎週のように実家に帰ると
「何かあった？」と心配されたりしますけどね(笑)

あと、オーストラリアでは長期休暇を取って家族で旅
行に行く家庭も多いです。有給休暇はもちろん、家族
の看護休暇や養育休暇なども取りやすいですね。

日本に比べ、家族で過ごす時間が長く、生活の中
で『家族』とのかかわりの部分が大きいと思います。

〈インタビューを終えて〉

オーストラリアでは日本の社会と似通った部分もあ
れば、ワーク・ライフ・バランスや家庭のあり方につ
いて先進的な面もあるようです。「仕事か家庭か」では
なく「仕事も家庭も」どちらもあって当然で、そのバ
ランスをとって生きることをオーストラリアの人々は大切
にしていると感じました。日本に暮らす私たちが仕事と
家庭の両立を重荷に感じることなく、バランスを取り
ながら楽しんで生きていければと思いました。ウールコ
ックさんと出会えて、心にさわやかなものが広がりました。
ありがとうございました。(インタビュー 編集委員)

日本女性会議2008 とやま

平成20年10月17、18日の両日、「日本女性会議2008 とやま」が富山市で開催されました。当編集委員も全体会・分科会に参加し、日本が抱えるさまざまな『男女共同参画』の現状・課題等を学びました。秋晴れのもと開催された「日本女性会議2008 とやま」をレポートします☆

全体会① 基調講演「男女共同参画 何が変わるのか？」 広岡 守穂氏

中央大学教授 広岡守穂氏のご自身や身の回りの体験を通しての具体的でわかりやすい、しかも含蓄のある話をされました。その中で印象に残った2つのお話をあげてみます。

その1

会社から帰ってきた夫が熱を出して寝ている妻に言う。
「大丈夫？ ゆっくり寝てればいいよ。」
「俺の食事は心配しなくてもいいよ。
外で食べてくるから。」

病気の妻の食事はどうするのかが頭になく悪意はないが、思いやりもない。
ついうっかり抜けてしまう家庭での場面。

その2

職場の同僚が結婚して、彼女に新婚生活について聞いた。
「よく父が『おまえはちゃんと、ご飯を作っているのか』と心配して電話をかけてきます。」

ご飯は、お嫁さんが作るものだという昔からの概念



人々の中に無意識に根付いている考えを根本から見直すことの必要性を感じました。「男女共同参画」への意識は一人ひとりがより具体的な場で改めていくことによって、世の中が変わっていくことを指摘され、男でもない、女でもない、人間がもって生まれた「自然」を大切に育てていこうという主旨で話を結ばれました。

ことに生涯の伴侶は最も大切な人です。自分の存在を認めてくれている人を見下ろしたりしてはいけないと強調されました。心にしみじみとくるよい講演でした。



全体会② 記念講演「土のひびき」 加藤 登紀子氏

鴨川自然王国を拠点とし、循環型社会の実現に向けて活動されている加藤登紀子さん。自らの体験をもとに、「植物があったから私たちは生きている」と強くおっしゃっていました。歌は3曲歌われ、アンコールの声にこたえて“百万本のバラ”を熱唱。途中ステージから降り、客席真ん中近くまで来て、みんなと握手。

最後に力強く、そして、とても豊かな声で『(みなさん) 頑張りましょう!』と…その一言で、心が温まり、涙と感動でいっぱいになりました。

分科会① 第8分科会 ワーク・ライフ・バランス パネルディスカッション『仕事と生活の調和 ～自分らしく生きるために～』

私たちが社会で生きていくためには、仕事(ワーク)と私生活(ライフ)のバランスを上手にとることが必要です。その根底には次の4つの領域があります。

- ① 仕事
- ② 自分(健康・自己啓発)
- ③ 人間関係(家族・友人)
- ④ 社会貢献(より良い社会を次世代に残す)

現在の日本では、「仕事」が中心で「私生活」は二の次になりがちですが、会社や社会がより良い発展をするためには、左記4項目について皆が共通の認識を持ってワーク・ライフ・バランスを定着させていくことが必要だと思われます。

企業には社員の仕事と私生活が共存できるようサポートすることが求められ、社員は自分を含め家族の健康管理、自己啓発、社会貢献等仕事以外の面についても努力しなければいけないのではないのでしょうか。

働く女性にとっても家事・育児の両立支援や育児休業制度を打ち出すだけでなく、男性も女性もそして何より企業がこのことについても変革しなければならないのではないのでしょうか。



あまり難しく考えないで、働く意味、また、生きる意味を考えながら、自分で納得できる「ベターライフ」「ベターワーク」の両方を充実できるよう相手への思いやりの気持ちも持ち、自分を変革(チェンジ)していかなければならないと思います。

分科会② 第10分科会 科学 カフェトーク、パネルディスカッション『科学へのチャレンジ～夢をかたちに～』

この分科会には、科学に興味を持つ中学生・高校生も一緒に参加しました。その中の1人の中学生に聞きました。



ずらりと並ぶ丸いテーブル、白のクロス、キャンドルとオレンジジュースのポット、まるで結婚式場だ。僕たちはしずしずと会場に入った。

自ら“森本おじさん”と称する国立天文台名誉教授といういかめしい肩書きでありながら、とても気さくなおじさんが、ズック姿でテーブルからテーブルへと移り、まるでかっこいいアゲハ蝶のように歩き回られる。万有引力の話、ブラックホールの話、これからの宇宙の課題など話は尽きない。科学が苦手な僕もいつの間にか夢中で話を聞いていた。

つぎつぎとパネリストの話があり、僕たちの片山学園の理事長片山浄見氏が、何事にも疑問や興味をもった少年時代のことを話され、疑問と興味は夢の実現への源であると信念を述べられた。

サイエンスプロデューサーの杉木優子さんがふだん行っておられる実験のひとつをみんなに披露してくれた。それは風船による静電気の伝導で、参加者全員が手をつないで、びくびくしながら待った。いっせいに身体に静電気が伝わり、“わあ!”と声があがる。

“宇宙はひとつ、みんなの心もひとつ。みんな輪になって手をつなごう。”僕はこの思いを強くした一日だった。



たくさんのボランティアスタッフの方々も活躍!

男女共同参画推進地域リーダー活動紹介 「山田・婦中ブロック 朗読劇」

あらすじ

これは、定年退職した父、仕事をしながら資格取得に忙しい母、結婚した長女、もうすぐ結婚する次女の4人家族が巻き起こす日常から、男女共同参画について考える朗読劇です。

定年退職後、家でゴロゴロ過ごすだけの父に対し、母が苛立ちを感じているところから始まります。実は、父は、母としばらくの間、旅行に行きたいと思っていましたが「1人で行ってください、私は忙しいんです。(へ)」と断られていました。そんなある日、長女の妊娠がわかり、長女が父母に協力を頼もうと実家に帰ってきたときの事です。



父：「里美、仕事辞めんのか？ 普通、女は子どもできたら会社辞めるもんやろ？」

母：「最近辞めずに働き続ける人も多いのよ。今、家でゴロゴロしているのは、あなたのように定年になって『することがない』って思ってる人だけよ。でも…あなたが家に居るから、私も今まで出来なかったことをやれているのも事実ね♪」

父：「そうなのか、俺もちょっとはこの家で役に立ってるんだな。産まれてくる孫に、頑張っている姿見せたいなあ。」

半年後、長女が産休に入り、実家に帰ってきました。最近の父について、母・長女・次女の3人で話をしています。

長女：「最近のお父さんはどう？」

母：「お父さん、ご飯作ってくれるんだけど…エプロン姿のまま家の周りをうろろするから恥ずかしくて(^_^;)。」

次女：「でも、お父さんがこんな風変わったのは、お母さんが資格取得とかやりたいことをきちんとお父さんに話してからじゃない。」



その後、赤ちゃんが産まれました！ある日の夜、父母二人で晩酌をしながら、母は父にかっこいいエプロンをプレゼントし、「孫の世話が落ち着いたら一緒に旅行に行こうね♥」と約束しました。

連載 家庭の一場面から…第4回 「今も昔もやんちゃ坊主」

この秋、妻と二人の孫を伴い関西方面に旅行に出かけた。宝塚歌劇を見た妻と孫の愛子はとても喜び、妻の瞳は少女のように輝いていた。

この美しい妻の表情が一変したのは、私が誘った京都の蒸気機関車博物館に行ったときのことだった。

機関区にずらりと並ぶ本物の機関車。「乗り物絵本」が大好きな孫の宗助も手を叩きはしゃいでいる。大勢の男たちが熱心にカメラを向けている。その間を縫って、私も写真を撮り続けていると、背後に強い視線を感じ、振り返った。そこには妻の実に無表情な顔があった。あきれ返っているようにも見え、怒っているようにも見える。私はあわててカメラを納め、もっと見たい気持ちで機関区を後にした。出際に売店のおばさんが、「男はなんて、生まれたときから動くもん好きやもんね。」と、妻のほうを向いて笑った。

妻よ、わかってほしい。男なるものの性を。これからは君と寄り添っていく日々、お互いを理解しあって支えあっていこうではないか。



男女共同参画社会づくり作文コンクール

男女が互いにその人権を尊重し、責任を分かち合い、性別に関わりなく個性と能力を十分に発揮できる社会（男女共同参画社会）の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に男女共同参画に関する作文を募集したところ、135点の応募がありました。

【最優秀賞】 高見 俊平さん（東部中学校3年）

【優秀賞】 石井 遥さん（岩瀬中学校1年）

大泉 圭史さん（西部中学校3年）

小林 紗英さん（東部中学校3年）

伊東 翔吏さん（東部中学校3年）



応募いただいた皆さん、ありがとうございました。優秀作品の中から最優秀賞作品を紹介します。



「わかちあう、仕事も、家庭も、喜びも」

東部中学校3年 高見 俊平

「わかちあう、仕事も、家庭も、喜びも」

これは、男女共同参画白書の表紙に書かれたスローガンです。今回、このスローガンについて考えるため、ぼくの一番身近な、我が家の生活を振り返ってみることにしました。

ぼくの母は、結婚と同時に仕事を辞め、主に家事、育児をしていました。当時は、結婚して退職することは珍しいことではないけれど、両立させてがんばる人も増えてきた時代だったそうです。しかし、まだ父親の育児休業や育児参加そのものがあまり見られず、父親は外で働き、母親が子育てをするという形が自然な時代だったと聞きました。ぼくたちが病気やケガのとき、父は当然心配したり付き添ってくれたりしたそうですが、おむつ替え、おんぶや添い寝などの日常的な世話は、母の仕事だったそうです。

最近、お父さんが赤ちゃんを抱っこして、お母さんが身軽に歩いている家族を見かけると、ぼくの母は、「今どきの若い人たちはいいねえ。」とうらやましがります。「当たり前のこと」が時代とともに変わってきたのだと感じました。

十年前、ぼくの祖母が病気で倒れ、家で介護が必要になりました。母が体調を崩し、父が母に代わって祖母の付き添いをする夜もありました。父が疲れた体で仕事に出かけた日は、とても不安になり

ました。その祖母は、二年前から入院生活を送っています。高齢化社会と男女参画、どちらも難しい面が隠れていると思います。

我が家では、父と母の助け合い方、支え合い方も変化してきて、さらに、ぼくたち子供もその支え合いの輪に入るようになってきています。最近、父の応援もあって仕事に復帰した母は、とても生き生きしています。ぼくたちはなるべく各自の食事の片付けや洗濯をし、夏休みには、掃除の分担もしています。正直言って、全部母がやっていたころと違って、楽なことではないけれど、「今のうちに習慣にしておく、将来きっと役に立つよ。」という母の意見に少しは耳を貸しています。

仕事を持ち、家庭を持つということは、家族がお互いのあり方をわかり合い、助け合うことだと思います。そうすることで、喜びも分かち合えるのだと思います。

